

万物が新しい生命の躍動を再開し、柔らかな早春のぬくもりに確かな春の訪れを感じる、この佳き日に、同窓会長 海老原洋子 様、教育振興会長 堀口芳明 様、PTA会長 梁瀬 剛 様 をはじめ、多くのご来賓の皆さま、そして保護者の皆様の御臨席を賜り、群馬県立高崎女子高等学校第七十四回卒業証書授与式を挙行できますことは、本校にとりましてこの上ない喜びであり、これまで本校教育の充実、発展にご尽力いただきました、関係各位に改めて感謝申し上げます。

ただ今、本校所定の全課程を修了した二八〇名に、その証として卒業証書をお渡しいたしました。諸君、卒業本当におめでとう。見てのとおり本日の式典は、現下の情勢を踏まえた、特異なものであります。何よりも、君たちの旅立ちを感謝と尊敬の念を持って見送るはずだった在校生の姿がここにはありません。しかしながら、君たちの卒業とその揚々たる前途を言祝ぐ気持ちは、この高女にかかわるすべての人々の、誰の胸にも満ちていることを、ここに言明し、校長として最後のエールを送ることといたします。

最後のエール、それは、勇みこそ行けと謳われた、君たちの学びはどうあるべきかということであります。5Gの全面稼働とともにやがて訪れる、society5.0の新時代は、これまで世界中の誰もが経験したことのない変革が、次から次へともたらされる時代であると言われていますが、来たるべき、その変革の時に、君たちに求められるものとは何でしょう。

圧倒的な知識、思考力、判断力、表現力、そして協働していく力、でしょうか。全くその通りです。君たちは、ここ高女において、そうした力を徹底的に身につけるために、厳しい指導を受けてきました。そうした学びは普遍的なものであり、誰が何と言おうと、これからも追い求めて行かなければなりません。本当に力を持っている人だけが、人の役に立つ仕事ができるのです。君たちには、流石、高女の卒業生だと、これからも皆の心の拠り所となるような存在でいてほしいと思います。

しかし、Society5.0がもたらす大変革の時代にあつては、君たちの学びは、それだけであつてはならないのです。特定の分野に極めて深い知識を有する少年、少女がその博識を披露するテレビ番組がありますね。高女の生徒もかつては登場したことがあるそうですが、あれを見ながら私たちが気付くべきは、小さい子どもながら、よくそこまで覚えたものだと感心することではなく、得意な分野について驚くべき博識ぶりを披露するときの、彼らの生き生きとした瞳の輝きではないでしょうか。彼らの瞳には、本当に、心の底からこれが好きなんだという、学ぶこと、知ることへの強い思いと喜びが満ち溢れています。いくら高い偏差値を誇っていても、あの瞳の輝きを持たずして、誰の心も動かせはしないでしょう。

上級学校へ進学するため、難しい資格を取得するために、勉強をしなければならないのは当然です。高得点をとり、常に周囲に期待されながら、これまで多くの目標を達成してきた君たちは、なおさら、価値のあるものを得るために勉強をしなければならないという思いが強いです。しかし、学ぶということは、それ自体が本来素晴らしいことであり、それ自体が喜びに満ちたものであることも決して忘れてはいけません。そしてその素晴らしさ、喜びを知っている人こそが、知識を基盤に、それを超えて新しいものを生み出せる

のだと知ってほしいのです。

高名なアメリカの心理学者、アブラハム・ハロルド・マズローによる、欲求5段階説の価値は、人間の欲求を階層化し、低次の欲求が満たされて高次の欲求につながっていく、と分析したことではありません。マズロー学説の真価は、人間とは、生理的な欲求、精神的な欲求が満たされた後、必要に迫られなくても、なおも自分自身を成長させようとする存在である、と看破したことです。社会経済的な成功を収めた、その先にこそ、人間の本当の価値があると考えたのです。それは「自己実現」と呼ばれています。そうです。学ぶことこそが、生きるということであり、他の誰でもない、自分の本当の価値を表現していくことなのです。

私は、以前、肢体不自由の特別支援学校の授業を見せていただいたことがあります。多くの生徒たちがそれぞれの身体に様々な困難を抱えながらも懸命に学んでいました。中でも大きな感銘を受けたのが、生まれながらの障害のために人工呼吸器をつけながらも、ALITの話す英語を聞き取り、必死でノートに書きつけている生徒の姿でした。良い点を取るため、資格を得たいなど何かのためでは決してなく、彼は今どうしようもなく学びたいのだ、とそのとき思いました。学ぶことは喜びであり、生きることなのだと強く感じたのです。それは決して憐憫ではなく、生きていくことの素晴らしきであり、感動そのものでした。

これから諸君は社会の様々なところで生きていくこととなります。どんな仕事に就いたとしても、生き生きとした輝きに満ちた瞳で向き合えるよう、自分の学びを大切にしたいと思えます。そして、それができたときに、他の誰のものでもない、君たちだけの誇りある人生は広がり、それは、やがて素晴らしい人生の奇跡となるのです。

卒業生諸君、ここで君たちが学ぶことはもうありません。今こそ、尊き力を身にもこそ持て、巣立つときです。すでに、君たち、一人ひとりが高女なのです。自分自身の人生を堂々と進んで行きなさい。そして、決して忘れてはならないことは、ここにいる二八〇名の卒業生一人ひとりが、高崎女子高等学校の未来であるということです。今教室で君たちを見つめる在校生たちも、必ずや君たちに続き、高女の歴史は綿々と、堂々と、そして誇り高く続いていくのです。

結びになりましたが、保護者の皆様、お子様のご卒業誠におめでとうございます。心からお祝い申し上げますとともに、これまで本校の教育活動に対し、惜しみないご支援を頂きましたことに深く感謝申し上げます。

卒業生諸君、いよいよお別れです。君たちの掛け替えない高校生活は、身に纏った伝統ある制服とともに、今閉じられようとしています。堂々と本校に新たな歴史を刻んだ諸君を誇りに思うとともに、諸君の今後の大いなる飛躍と大成を祈念し、式辞といたします。

令和四年三月一日

群馬県立高崎女子高等学校長

濱野 雅樹